



# 地震発生から「1時間以内の救出」 を目指した近隣共助の備え



神奈川県秦野市 千村台自主防災会  
会長 原田 剛

## 1 はじめに

阪神・淡路大震災の全死亡者のうち「1時間以内に亡くなった方が6割」と、NHKスペシャルで報道されました。「生死を分ける72時間」と言われますが、実はわずか1時間で大半の方が亡くなっていた、という事実に驚きました。

つまり「救命率を上げるには災害発生から1時間以内の救出が条件」ということです。

1時間では、自主防災会の役員が集まるとか、救助隊を作るなどの活動を始める遙か前だと想像されます。そのような時点で「救出する」には、近隣共助しかないと考え「効果的な近隣共助を、できる限り早く始められる工夫」について検討しました。

その結果、救助用資機材を小型収納庫に収めた「救命ボックス」の設置により可能になると考え、進めて参りました。その経緯についてご説明致します。

## 2 立地のご紹介

千村台自主防災会は神奈川県西部の秦野市にあり、昭和54年に開発された高台の住宅地で、290世帯650人が生活しています。急傾斜地などはありませんが、近くに活断層で有名な神縄-松田断層があり、地震が最も懸念される災害です。

## 3 阪神・淡路大震災の教訓

地震発生直後の様子を調べ、次のような状況であったことを知りました。

・災害現場に人がいない。無事な人は避難場

所に避難していた。

・災害現場に道具が無い。のこぎり・バールを求め消防署に殺到した。

・近隣共助による救出はヘルメット無し・素手作業であった。

など。

このことから、「人」を現場付近に留め、その人に「道具」を渡すことができれば、より早く効果的な近隣共助ができるのではないかと考えました。

## 4 「1時間以内」の救出

大規模災害が発生すると、「人」はまず一時避難場所に集まります。その一時避難場所を「悲鳴や助けを求める声、煙や炎・においなど異変が感じられる場所」に設定し、そこに「救命ボックス＝道具」を置くことで、現場のすぐ近くで「人」が「道具」を手にすることができます。

その視点で自主防災会の一時避難場所の位置を見直し、50m圏にすべての住宅が入るように救命ボックスを配置しました（図



図1 救命ボックスの設置場所（赤の救命マーク）



写真1 救命ボックスの外観と災害伝言板



写真3 防災訓練時の救命ボックス資機材の点検



写真2 救命ボックス収納資機材の一例

1、写真1、写真2)。これにより1時間以内というのは不確かですが、早期発見・早期救出が見込めると考えました。

## 5 「救命ボックス」のカギの運用

とはいえ、近隣共助のカナメである救命ボックスを災害時に開けられないと意味がありません。カギを、従来の会長や役員の個人管理ではなく、ダイヤル式キーボックスを使った運用としました。これにより、番号さえ知っていれば誰でもカギを取り出して開けることができます。

## 6 住民の意識の変化

今年度10か所すべての一時避難場所に救命ボックスを設置し、これを使った防災訓練を初めて実施しました(写真3)。

従来は一時避難場所で人員確認の後、自治会避難場所に全員が集まり、本部主導の訓練をしていたのですが、今年度はそれぞれの一時避難場所で救命ボックスの説明や、

それを使った訓練を加えました。要するに近隣共助の訓練です。

住民の皆さんが一時避難場所で熱心に訓練してくれたため、全体の進行が遅れ、会長としてヤキモキしたのですが、「イザという時の大切な道具、自分たちの道具と認識してくれた!」と感じられた瞬間でした。

## 7 おわりに

迅速な救出を可能とする近隣共助の備えについてご紹介致しました。

その共助活動の大前堤は「無事に生き残る」こと、すなわち自助です。自助は各家庭での備えであるため、備えの実態把握は難しいものがあります。そこで、全世帯「防災自助アンケート」を毎年実施するなど、自助の啓発活動にも力を入れています。

最後に皆様にご提案があります。「救命ボックス」の設置です。

今年度、救命ボックスの設置がすべて完了した時、自主防災会の会長として肩の荷が少し軽くなるのを感じました。災害は起こってほしくないものですが、万一の際、最優先となる「命を救う近隣共助がいち早く機能する」という安心感からだと思います。

救命ボックスは収納する資機材を適切に選ぶことで、どのような災害にも対応することができます。ぜひ皆様も安心を手に入れてください。